

ミステリ読書案内

2023. 1. 21 発行元

第439号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

東川篤哉「仕掛島」

9月に東京創元社から東川篤哉の『仕掛島』が出た。『このミステリーがすごい!』では24位のランクだった。9月30日の出版だったので、読んだ人が少なかったのではと思う。もう少し順位は上がっても…。

「孤島」の閉ざされた空間

ここ数年純粋「本格もの」に取り組む作家が増えてきて有難い。東川篤哉は元々「本格もの作家」なのだが、本書はコチコチの本格もの仕立て。瀬戸内海の孤島・斜島。そこに奇妙な館と言うべき建物が立っている。そして集まってくる一族の者たち。台風がやってきて、閉ざされた空間が完成する。

この設定は右の囲みに書いた『館島』で一度試みたものだが、二十数年経って再挑戦してみようという気になったのだと思う。本書は『館島』から20年以上後の出来事として書かれている。

舞台は斜めになった島

表紙カバーの絵は極端すぎる。これでは人が住めない島のような。南側は低く、北側が絶壁になっている島が舞台。「御影荘」はコの字型をした建物だが、中央には円形の展望台兼図書室がついている。「見取図」がついていて期待させられる。

一族の名前は西大寺。岡山県の出版社を経営。少し前に前当主の西大

寺吾郎が亡くなり、四十九日の法要と遺言状の開示が行われることに。行方不明だった関係者も集められて…孤島に集合。

探偵役を勤めるのは行方不明だった人物を探し出してきた私立探偵・小早川隆生。ワトソン役は若い弁護士の矢野沙耶香。まあ、ユーモアミステリを得意とする東川作品なので、ずっとけた会話や行動が随所に出てくる。

遺言書が開示された夜中に赤鬼騒動があった。次の日の朝に沙耶香たちは東屋で死体を発見する。全身骨折だらけのような状況だった。警察に連絡するが台風のため来るのは当分無理の連絡が…。

後半思いがけない仕掛け

過去の事件が明らかになってくる後半になると急激にヒートアップしてくる。隠されていた背景、建物にある仕掛け、人物が消え失せる謎、次々と奇抜なトリックが読者の眼前に示される。「ちょっとそれは実現不可能なんじゃないか」と思いつつも、驚かされることばかり。

これぐらい徹底した方がミステ

「館島」 2005年東京創元社。左に取り上げた『仕掛島』の前作ということになる。ただ、物語に連続性があるわけではない。瀬戸内海の隣の島であり、登場人物に親子関係があったりするけれども、まったく別個の話として読むことができる。

こちらは1980年代の設定。天才建築家だった十文字和臣の建てた孤島・横島の別荘。四階建てで六角形。銀色の外装で、中には螺旋階段があるという。(螺旋階段が好きなんだなあ) 館が完成後少ししての冬。和臣の死体が螺旋階段の踊り場で発見される。真相がわからないままに過ぎる。夏になり、未亡人の招待を受けた関係者が館に集まる。そこで展開していく連続殺人事件。謎を解くのは…。

リとしては楽しめる。冒頭にある伏線も上手に回収しているし。『仕掛島』の題名も結末まで読むと納得。「斜め島」よりも「仕掛け」の方が重要ということ。

本の帯には「デビュー20周年記念刊行」とあり「東川篤哉長編史上、最大最長最新傑作!」と書かれている。ちょっと大袈裟すぎる気もするけれども、東川篤哉はまだまだ期待できるということ。是非『島』シリーズの新作を書いてほしい。

松岡圭祐「探偵の探偵 桐嶋颯太の鍵」

11月に角川文庫

から出た本。かつて講談社文庫から出ていた『探偵の探偵』シリーズは既に完結している。他シリーズとのコラボ作品もあったが、純粋の『探偵の探偵』は久しぶりになる。とは言いながら紗崎玲奈が主人公ではなく、脇役だった桐嶋颯太をメインに据えた作品。『探偵の探偵』は、ともすると違反行為・犯罪行為を中心に調査活動を展開する悪質探偵業者を取り締まるための探偵業者のこと。一応「正義の味方」で、弱者を守るために行動するのだが、実際はどちらもどっちの騙し騙されのギリギリの攻防が続くことが多い。

女子大生の瑠香がアルバイトでガールズバーの仕事始めたなら、ある客に付き纏われるようになり、監視され、囚われの身になりそうに…。探偵に依頼するのだが、最初に頼んだ探偵はボコボコに怪我をさせられあえなく降参。やむなく「探偵の探偵」であるスマ・リサーチの桐嶋颯太に頼むことに。桐嶋の動きで一旦納まるように見えるのだが…。そこからが激しい展開に。以前あったミステリ要素は薄くなり、『高校事変』などにつながる派手な活劇のバイオレンス性が強くなっている。更に続編がでるかどうかはわからない。